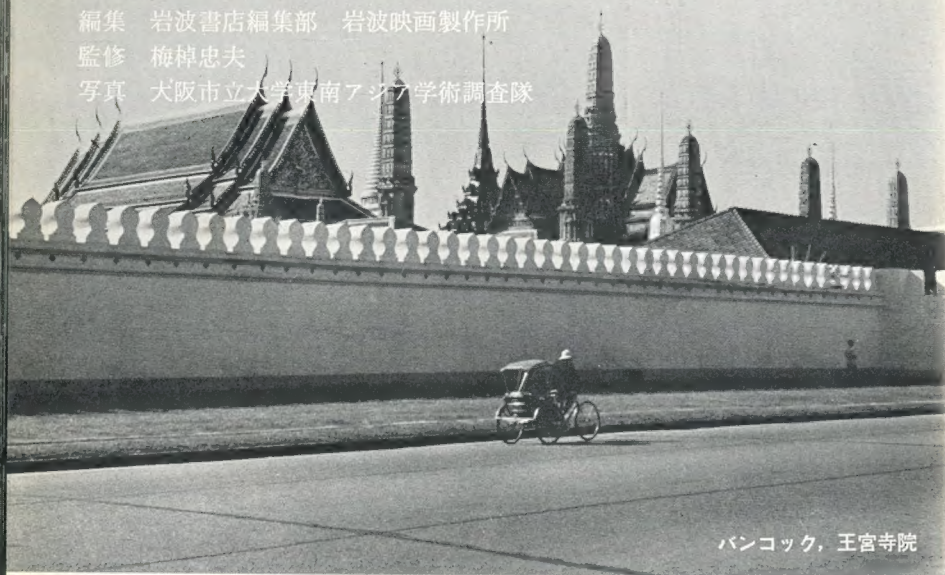
タイ

―学術調査の旅―

岩波写真文庫 275

タイ 275

岩波写真文庫 275 タ イ ―学術調査の旅―
編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
監修 梅棹忠夫
写真 大阪市立大学東南アジア学術調査隊

バンコック，王宮寺院

はじめに

大阪市立大学では、一九五七年の十一月から翌年の四月にかけて、東南アジアに学術調査隊を送った。タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスの各国を訪ねたが、なかでもタイには一ばん長くいた。一行は六人。みんな生態学者で、そのうち二人は植物を、二人は動物を、他の二人は人類を担当した。日本から国産ジープを三台もって行って、それに研究資材、宿営設備のいっさいを積んだ。さいわい事故もなく、約一万二千キロを走って、かなりの標本、資料、映画、録音などをもって帰ることができた。学術的成果の発表は別の機会にゆずって、ここでは、タイ国内での見聞をまとめて見よう。タイは昔からの親日国で、いまも日本とは関係の深い国だが、実状はあんがい知られていない。この国の人びととの最近の生活ぶりを、これでいくらかでも伝えることができれば、幸いである。

目　次

定価100円 1958年9月25日発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

ファン
チエンライ
ルアン・プラバン
シエン・コアン
ヴィエンチアン
ラ オ ス
ドイ・インタノン
チエンマイ
ランプーン
ランパン
ノンカイ
メ コ ン 河
ウドン
ウッタラディト
スコタイ
ターク
ピサヌローク
ビ ル マ
メ ピ ン 河
ナムパサク河
コンケン
タ イ
ナコン・サワン
チャイナート
ウボン
ロブブリ
サラブリ
ナコン・ラーッ・シーマ
ナコン・パトム
アユタヤ
ナコン・ナーヨク
カンチャナブリ
バンコック
メナム河
カンボジア
タ イ 湾
0 50 100 150 200粁

出発 準備期間が短かかったので、出発まではずいぶんいそがしかった。軽装備で機動力を発揮する方針をとった。ジープの後部にキッチリはまる木箱をつくり、資材はそれにつめた。自動車は別にして、荷物は全部で約一トン半におさえた。十一月はじめ、大学関係者や家族に見送られて神戸を出帆した。

家族の見送りを受けて神戸港を出帆する

バンコックに着く 航海は平穏だった。台湾沖をすぎると間もなく、ベトナムの海岸が見えてくる。東南アジアがあまり近いのでおどろいた。まるで隣国である。十日ほどでタイの首都バンコックに着く。バンコックは、メナム河を河口から四十キロほどさかのぼった河港だが、大きい船も入る。

バンコック港

装備 バンコックでは、日本大使館の人たちの親切と協力とを忘れることができない。ある日、大使館の前庭で、わたしたちの全装備を展示して、在留邦人に見てもらった。日本の探検装備は、カラコラム、マナスル以来の経験で、ずいぶん進歩したが、純熱帯の経験は少いので、いくらか新工夫をした。

大使館の庭で装備品の展観をする

太平洋学術会議 ちょうどバンコックでは第九回太平洋学術会議が開かれるところだった。それは、太平洋をめぐる諸地域の科学上の問題を討論するために、数年に一ぺん開催される大きな国際会議である。開催地は各国のまわりもちで、こんどはタイの番だった。

エカフェのサンチタム・ホールで開会式

遠足 太平洋に関係をもつ四十ヵ国から、約四百人の学者が集って来ていた。日本代表団は日高孝次団長をはじめ三十名をこえた。わたしたち六名もそれぞれの専門分科会に所属して研究発表を行った。約二週間にわたって熱心な討論がつづき、あいまに遠足や見学旅行が催された。各国学者、とくにタイの科学者とすっかり仲良くなった。

各国の学者が仲よく遠足にゆく

移動研究室 会議が終って、いよいよ出動準備だ。わたしたちの場合、車は輸送機関というよりは、これが家であり、仕事場である。どこへでも移動できる研究室である。三菱ジープだが、三台とも形がちがう。ワゴンとハシゴ車がある。六人とも国際免許証を持つ。

テントもベッドも机も椅子も車に積んで

メナム河右岸トンブリ側より対岸バンコックを見る

首都バンコック　奥地に向け出発するまえに、首都バンコックを一わたり見物しておこう。バンコック市の主な部分はメナム河の左岸にある。右岸のトンブリ地区とあわせると、現在の人口は百五十万近いという。戦後急速に発展した。広い街路と大きな建物をもった近代都市である。しかし、市中には数百にものぼる古い、美しい寺院があって、立ちならぶ仏塔は、独特の景観を形づくっている。市内の交通は、市電・バスのほかに、タクシーおよびサムロと称する輪タクがおびただしく走っている。自動車の数はそうとうに多い。タイ政府は、戦後つとめて国際機関の本部をバンコックに誘致しようとしているようだ。ＥＣＡＦＦＥ、ＳＥＡＴＯなどの本部がある。市街は、国際都市としてますます発展の一路をたどりつつある。昔はシンガポールがこのあたりの中心だったのが、いまはバンコックが東南アジアの中心になりつつある。主な国際航空路線はみなこの都市を通る。下町は、にぎやかな商業地区である。華僑の店が圧倒的に多い。タイ文字のほかに漢字の看板も多い。看板の意味はわかるし、顔もよく似ているから、われわれ日本人には、あまり外国へ来たという感じがしない。在留日本人は約七百。日本料理屋もある。

バンコック第一の大通り．正面は憲法記念塔

バンコックの商業地区．華僑の店が多い．左端はサムロ

ビジネス・センター，ニュー・ロード．日本商社の支店も多い

国会議事堂

農林省新庁舎．近代タイ建築の一例

国立チュラロンコーン大学．唯一の総合大学で中堅官吏の養成所

立憲王国　十八世紀には首都はすこし北のアユタヤにあった。ビルマの侵攻を受けて徹底的に破壊されたので、そ

王宮寺院ワット・プラ・ケオ．中にエメラルド・ブッダをまつる

の後トンブリに都をうつし、さらにいまのチャクリ王朝の祖ラーマ一世が、バンコックの都を開いた。タイの近代化は、ラーマ五世すなわちチュラロンコーン大帝の即位にはじまる。一八六八年、明治大帝の即位と同年である。着々と近代国家建設の道をすすんで来たが、一九三二年に立憲革命がおこり、タイは立憲王国となった。現在、一院制の人民代表議会がある。王様と王妃は、国民のあいだに絶大の人気がある。

パスツール研究所．毒蛇を飼い，血清をつくる

タイの穀倉，メナム河下流域．水田中の水路

水・バンコックはメナム・デルタ下流の低湿地にある。土地は水面からほんのわずか高いだけである。市中にも無数の掘割があるが、郊外ではただまんまんたる水がすべてのものを浸している。水路は縦横に発達し、主な交通機関はもちろん船である。歴代の支配者は、道路の建設よりも運河やクリークをつくるのに努力したという。村は、川や運河に沿っている。水路が大通りで、家は水路に面した方が表である。

地上交通と水上交通は立体交叉で

村のメイン・ストリート

水に面して店をひらく．広告も水に向けて

家の前には魚とりの四つ手網をしかける

米　家の裏は見わたすかぎり水田である。水路網など灌漑設備が完成してメナム下流低湿地はタイの穀倉となった。

クリークづたいに入ってゆくと，森の奥に，つぎつぎと村があらわれる

村は通路が水という以外はふつうの村とかわりない．きちんとした寺もある

小さな船にわずかな品物をのせて，家々の玄関先を行商人は渡ってゆく

クリークの生活　バンコックから小さなモーターボートでメナムを渡り、対岸のクリークの奥を見に行った。水路はジャングルのしげみの中を迷路のようにこまかくわかれて走る。ココヤシやバナナの林があり、しげる木かげに、水上にのり出すように家がある。こんなところにもこんな生活があったのか。大都市バンコックのすぐそばだけに、よけい驚かされる。店もあれば、農家もある。舟で動いている店もある。寺もある。クリークの水はドロンコだが、木々の葉の色を反射して緑をおびる。村人たちはその水ですべての用を足す。

村の食料品店の店先

魚釣りは商売なのか趣味なのかわからない

メナム河を上下する運送船の群．ナコン・サワンにて

奥地の森林から切り出された材木

メナム河　ほんとうはメナム・チャオ・プラヤという。メナムというのは河ということだから、メナム河という言い方はおかしいが、外国ではそれで通ってしまった。タイはメナム河あってのタイである。タイ族は北方、雲南省の山地からメナム上流に沿って移住しはじめ、ついにその肥沃きわまりない大沖積原を占拠した。米の国タイにあって、その全生産額の約六十パーセントは、メナムの沖積原で生産される。メナム河はまた、タイの大動脈である。それを上下しつつ物資をはこぶ水上生活者の群は、おびただしい数に上る。

バンコックからの定期客船．チャイナートで

女たちは毎日，夕方にメナム河の水で体を洗う

メナム河の水浴．チャイナートにて

北タイへ　タイは四つの部分にわけられる。バンコックを中心とするメナム平原の中部タイ、マライ半島部の南タイ、コラート高原の東北タイ、それから山の多い北タイである。わたしたちは、車をつらねて北タイに移動を開始する。バンコックから北タイの中心地チエンマイまで、三、四日行程である。

峠にはホコラがある。交通安全の神様だという

道路　大都市の近くは、りっぱな鋪装道路がある。いなかにゆくとおおむね鋪装はないが、それでも国道はなかなか手入れがゆきとどいていて気持がよい。交通量はきわめて少ないのでドライブは楽だが、いちばん危いのは放牧のウシと水牛である。警笛をならしても知らん顔で立っているのが多い。

“このへんウシ多し．注意！”

交通事故　バンコック市中でも、交通事故がじつに多いが、いなかの交通量のごく少いところでも、しばしば交通事故の現場にぶつかるのはどういうわけだろう。こんな広い道で、考えられないことだ。スピードは猛烈である。バスもトラックも百キロくらいで走る。車は、日本では想像できぬ故障を起す。

さんたんたる交通事故の現場

乾燥した森林　北タイへの道は、森林を突っ切って、北へ北へとのびている。乾季と雨季との交代がはっきりしていて、林が緑になるのは雨季だけだから、こういう森林を熱帯雨緑林という。乾季には黄葉して、おおかた落葉してしまう。乾燥してカサカサの森林になる。

カサカサに乾燥した森林をつらぬいて，道は北へのびている

バス・ストップ　いなかの庶民のいちばんののりものはバスである。かなりのいなかでも定期バスがかよう。暑いから、日なたで待つわけにはゆかない。道ばたに待合所があって、おしゃべりしながらゆっくりバスのくるのを待つ。外の水ガメに、奇妙な字があるのは選挙運動である。文盲の人は候補者の番号に印をつける。これは一番。

いなかのバスの待合所

建設　完成した国道は約八千キロ、建設中のもの五千キロ。タイの道の一つの弱点は、橋である。道はできても仮橋のままのが多い。それも、いまはひじょうな勢で新しいコンクリート橋をつくりつつある。タイ国中にみごとな自動車道路網ができる日も遠くない。

コンクリート橋ができるまでの仮橋

鉄道　北タイの中心地チエンマイ市に着く。わたしたちは車で来たけれど、バンコックからここまでは、鉄道がある。マラリヤに悩まされながら、一九二二年にやっと完成したものである。いま走っている汽車は、機関車も客車も日本製だが、みなマキをたいて走っている。駅の横に広いマキ置場がある。

機関車は日本製．マキをたいて走る

終着駅　バンコック、チエンマイ線は、いわばタイの東海道線だ。その終着駅チエンマイ駅へ行って見ても、あまりにも閑散なのにおどろく。バンコック行きは一日一本しかない。駅の構内の売店などは日本とよく似ているけれど、人やものの動き方はちがうのだ。日本の何十分の一しか動かない。

駅の売店．週刊誌などを売っている

空港　チエンマイのもう一つの玄関は、空港である。バンコックから約二時間で到着する。タイ航空の定期便がある。ついでに通信事情を記しておこう。チエンマイにはテレタイプの機械もあるのだが、電報はかなりおそい。ラジオはバンコックの短波が入る。テレビもバンコックにはあるが、ここにはない。

チエンマイ空港．タイ航空の定期便がある

タイ国第２の大都市，チエンマイの市街

チエンマイ　北タイの中心地であるとともに、タイ国第二の大都会である。といっても、人口わずかに八万。バンコックの十分の一以下である。タイの都市としては、バンコックが例外的なのである。これからしばらく、チエンマイを例にとって、タイにおける都市の生活を紹介しよう。交通はもっぱらバスによる。市内には電車はない。ここでもサムロはひじょうに多い。流しタクシーはない。自家用車族もかなりいるが、自転車はよく普及している。

交通はもっぱらバスによる．これも日本製

交通巡査は手動式交通信号を操作する

郵便配達は兵隊のような服を着ている

サムロ引きは木かげでひとやすみ

アメリカ人経営の病院

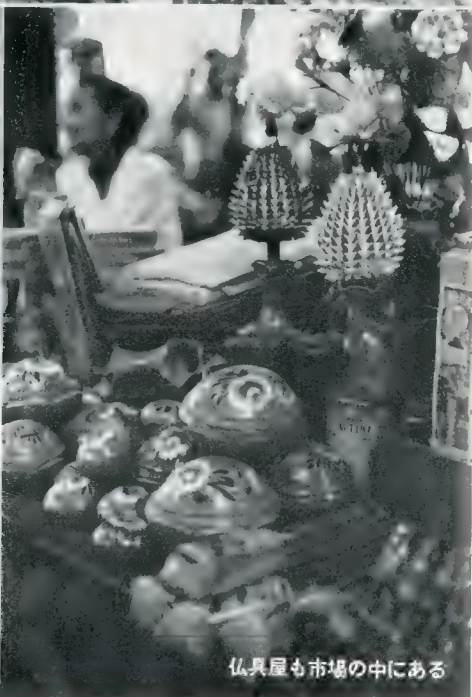
地方都市　ここはチエンマイ県の県庁所在地である。地方政府があり、内務大臣から任命された知事がいる。市には市会はあるがまだ選挙制ではないから、地方自治体とはいえない。警察、郵便局、電報局、営林署など、中央政府の出店がひととおりそろっている。学校はなかなかよく完備している。高校程度までならいくつもある。大学は、バンコックまで行かねばならぬ。

外国人　学校の中には外国人の経営のものがいくつかある。アメリカ人のとフランス人のとあり、どちらもキリスト教関係である。ほかに、アメリカ人の経営するりっぱな病院があり、郊外には救ライ施設がある。個人で動物園を経営しているアメリカ人もいる。日本人もいる。戦争中は三万の日本陸軍がいた。いまは三人になった。二人は写真屋さんで、一人は国連職員である。

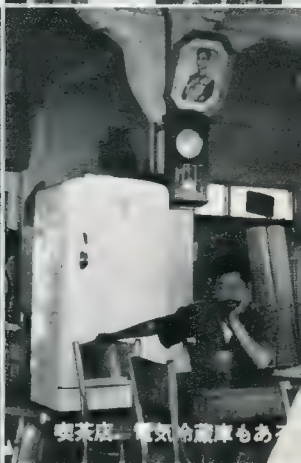
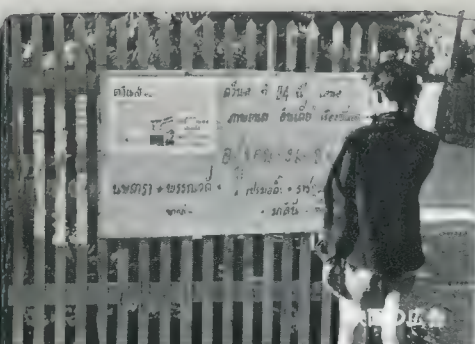
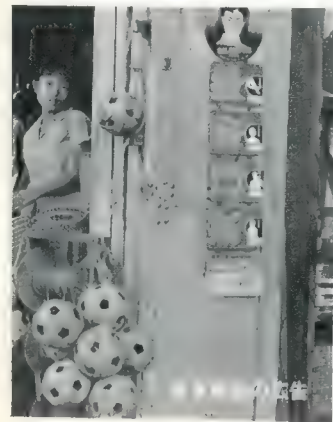
果物屋、名前のわからぬ果物

バナナ、品種がいろいろある

市場の中の広場、共同水道がある

淡水魚は竹の皿にのせて

仏具屋も市場の中にある

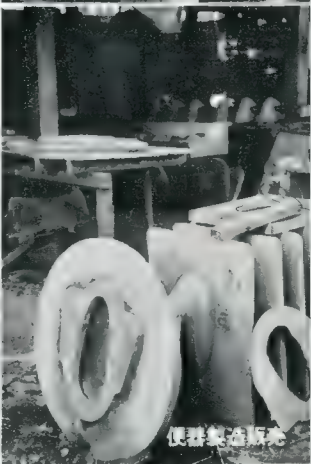
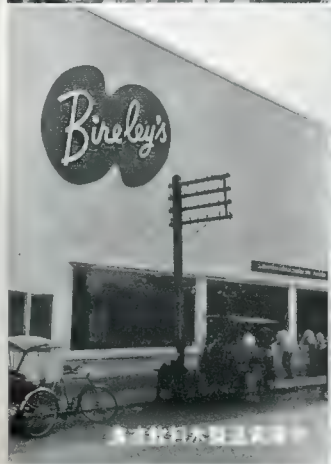
市場　タイの町はどこでもそうだが、まんなかに大きな市場がある。それをかこんで市街が展開する。チエンマイの中央市場はずいぶん大きい。もっとも中央市場といっても小売の市場である。チエンマイはもともと別の王国であって、王様があった。この市場をたてたのもその王家の先代で、現在の当主がこの市場の理事長をしている。市場の中をのぞいて見よう。市民の消費生活の内容がほぼ見当がつくだろう。店はタイ人の経営のもあるがやはり華僑が多い。繊維関係の店はインド人が圧倒的である。衣料、雑貨にはかなり日本製があるようだ。生鮮食料品の店を見て歩くのは大へんおもしろい。野菜、ブタ、ニワトリなどは珍らしくもないが、バナナ、マンゴー、マンゴスチンなどの果物屋、それにビンロウなどもある。天然チューインガムだ。

映画雑誌、週刊誌

風俗あれこれ　バンコックあたりの中部タイでは、もともと女も断髪で、男とおなじだった。チエンマイ方面の北タイは、昔から黒髪をたくわえ、美人の産地として有名である。ミス・タイのコンクールなどおおむね北部娘が一等をとる。この町にも新しい時代の風はふいている。娘たちの服装はすっかり洋装だし、マンボ・ズボンもいる。青年たちはサン・グラスをかけてオートバイを走らせる。映画は、もっとも人気のある娯楽である。市内に五、六館ある。タイ製のメロドラマあり、歌とおどりのインド映画あり、日本映画のチャンバラあり。ジャーナリズムもなかなか活動している。わたしたち調査隊の記事が、大きく新聞に出た。隊員で新聞記者のインタービューを受けた者は一人もないのに、どうして取材したのだろう。映画雑誌や週刊誌はもちろんバンコックで印刷されたものだが、チエンマイにも出版社がある。仏教関係の本をおもに出しているという。市内には軽食堂、喫茶店の類はよく発達しているが、バー、キャバレーの類はない。暑いところだから、清涼飲料水はよく普及している。アメリカものが多い。土地の特産品とて別にないが、竹をじつにじょうずに利用して家具を造る。

おみやげ物屋のタイ美人

散髪屋

喫茶店。電気冷蔵庫もあ

路傍の仕出し屋

歴史と文化　写真からは離れるけれど、ここでタイの歴史を概観しておこう。もともとタイ族は南中国にいた民族である。七世紀以降には雲南に南詔王国という国をたて、大理に都した。文化的にも政治的にも唐と対抗するほどの大勢力であった。すでにまえから、山を越えて今の北タイ方面への移住は始っていたが、十三世紀に南詔王国が元のクビライ汗に亡されてから、タイ族の南遷は決定的なものとなった。先住のクメール族をおしのけて、はじめはスコタイに都があったが、まもなくアユタヤに王朝が生れた。何度にもわたるビルマ軍の侵入は、タイに深刻な打撃を与えた。ビルマ軍を駆逐して今の王朝が成立したのは一七八二年である。もともと中国にいた民族だが、意外に中国文化の影響をうけていない。言語の系統はシナ・タイ語族に属するが、文字の系統は、カンボジアのクメール文字を改変したものだから、やはり南インド系である。語彙も、おびただしくサンスクリット系のものをふくむ。古くからクメール文明に接し、また深く仏教の影響をうけているので、美術、文学、演劇などの各方面にも、インド的要素がいちじるしい。しかし、気質的にはタイの人はきわめて楽天的・現世的で、その点、インド人とは大へんちがう。

竹かごの中は木炭

チエンマイ郊外，ドイ・ステープ山上の寺，黄金色にかがやく仏塔がある

インド様式の古い寺

仏教　大へん仏教のさかんな国だから、いたるところにお寺がある。寺の装飾は金ピカのが多く、はですぎて日本人の趣味にはあわない。昔は大乗仏教もあったが、いまはもっぱらセイロン伝来の小乗仏教である。従って戒律がきびしい。お寺にはふつう数人、あるいは数十人の、黄色い衣を着た坊さんが住んでいる。みんなきびしく戒律を守って生活しているのだ。たとえば、毎朝かならず托鉢に出る。帽子もなく、ハダシで歩くのだが、熱帯のことだから、たまらないことだろう。家々の前に立って、民衆からお布施をうける。鉢の中に、御飯やおかずを入れてもらうのだ。もっとも、集めて来た食物をそのまま食べるのではないようだ。たいていは寺の計理――これは俗人だが――が、それを売った金で食事をまかなう。午後はなにも食べてはいけない。

[illegible]は集ってお布施をする

坊さんの前では婦人はハダシになる

坊さんもかこいの中で水あびをする

[illegible]だろうか

市中を[illegible]歩く葬列

[illegible]

坊さんを先頭に　供物を捧げて葬儀場へ

[illegible]葬壇に国王の[illegible]

[illegible]市民たち

坊さんもバスに乗るが，金は持っていない

会葬者はサムロにのって

祭・葬式　神社があるわけではないから、祭というのはすべてお寺の祭である。都会でもいなかでも、大へんなにぎわいだ。葬式も、鳴物入りではでにやる。火葬だが、えらい人のはながく安置したのちにする。焼くまえに、町中を行列をねって歩き、供養をする。お墓というものはない。おなじ仏教でも、いろいろな点で日本と異る。民衆はたいへん仏教に熱心だが、檀家というものはない。金持は、あちこちのお寺から寄付をとられる。男は、一生に一度は出家する。ほんとうに頭を剃って寺に入る。坊さんになったことのないものは社会的信用が薄く、就職にも差し支える。これだけ仏教が盛んでありながら、宗派がないというのもふしぎだ。民衆の信教の自由は憲法で保証されているが、王様は仏教徒でなければいけない。王は三宝の守護者だ。

[illegible]

細君は青空台所でココヤシの実を

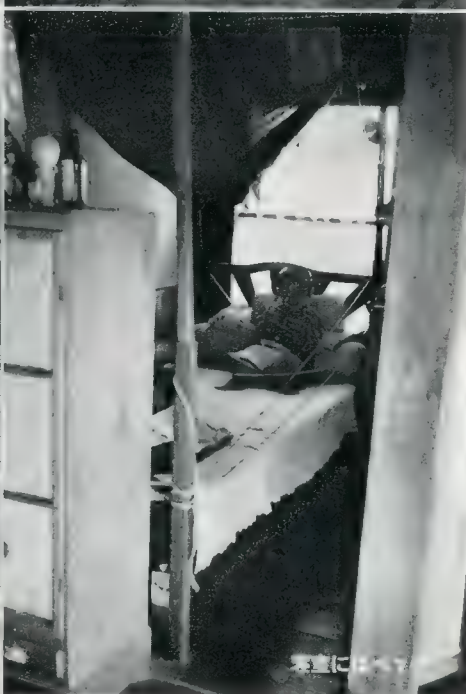
井戸の水汲みは主人の仕事である

台所の食器

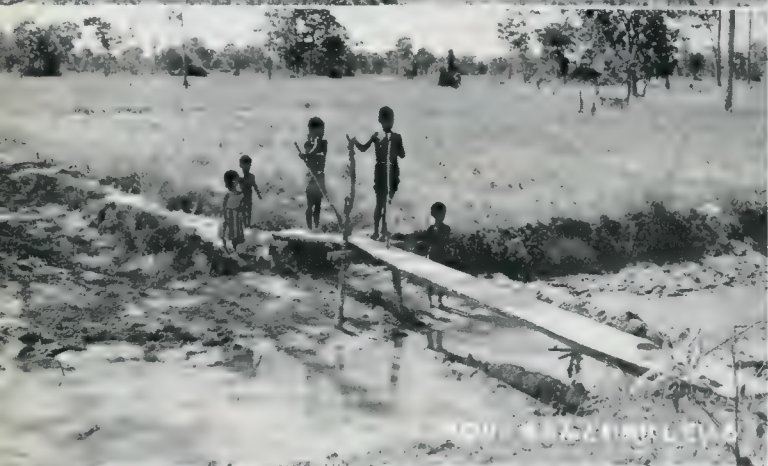
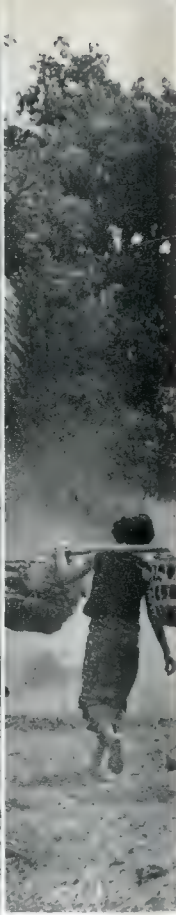
寝室にはベ

裏の小屋に古い自動車

小じんまりした平屋建．四人家族

王と王妃の写真，賞状，

ある市民の家庭　チエンマイで知りあいになった一人の市民の家庭を訪問した。小じんまりした家に、細君と子ども二人の四人ぐらしであった。裏庭に小屋があって、古い自動車を一台もっている。かれはこれでハイヤー業をいとなんでいる。ところが、おどろいたことには、かれは現職の軍人で憲兵曹長だという。昼間は憲兵隊へ出勤し、退庁後運転手に早がわりするのだ。

こういう官吏の兼職は、この国では珍らしいことではない。家の中は清潔で、寝室にはベッドがあった。ラジオ、ミシン、仏壇、洋服ダンスなどがある。電灯はあるが水道はない。裏に井戸がある。台所は床だけで屋根がない。雨の日は炊事はどうするのだろうか。台所につづいて、便所と水浴場がある。なんだか、金持か貧乏かわからないような家庭だが、中の上というところか。

スピーカーは近所の人たちに聞かすため

農家の経営規模　農家の生活はなんとなくゆったりしている。耕地をのぞいて、土地は原則として国有である。宅地と耕地はすきなだけ持てるというが、三町歩以上の宅地は税金の対象になる。農民の八割は小規模の自作農だ。平均、北部で四町歩ほどの耕地を持っている。わたしたちの滞在したある村では七十世帯のうち耕地は少いもので八反、多いもので四十町歩。ひと月のくらしに

夕暮の道ばたに村の若い衆があつまる

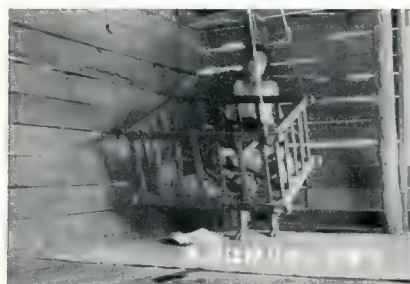
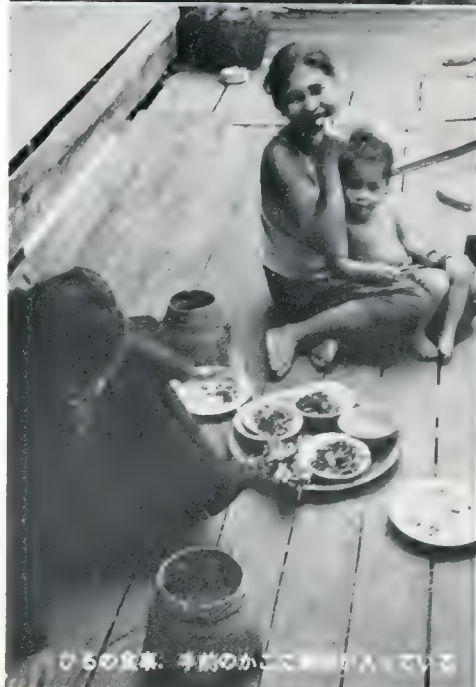
は百バーツ（千八百円）から三百五十バーツかかるという。現金収入としては米のほかに、ニワトリや家畜を売る。

米つくり 雨季のはじまる五、六月頃、農村は農繁期に入る。大がいは苗床をつくり、田植えをする。収穫は十一月から十二月のはじめごろになる。協同作業がひろく行われてきたが、米が商業作物としての意味をつよく持っている地方では、個人経営的になったところもあるという。反当収量は日本の半分から三分の一というところだろうか。化学肥料もほとんど普及していない。

畑の作物 畑につくるものには、落花生、トウモロコシ、キャベツ、ネギの類など、いろいろある。綿の畑は衣料自給のために重要である。北部の畑作で重要なのはタバコである。工場の少いタイ国だが、北部ではタバコの葉の乾燥場だけはたくさんある。日本と同じく、タバコは専売局の手で統制されているが、規格外の葉は、みんなせっせと刻んで自家製のをたのしんでいる。

バナナと竹　バナナばかりはどの家の宅地にも植えてある。実が目的ではない。葉がハトロン紙のかわりになるのである。どんなものでもバナナの葉で包んでしまう。刻んだ軸は豚の餌になる。竹は建築用材としていたるところに使ってある。平たく伸ばして、壁や床板にするし、柵にも使う。こまかくさいて籠にもするし、いろいろな小道具もつくる。竹細工はおどろくほどうまい。

腰の高い家　この国の家は大都市のほかはみな腰が高い。平野部では森林がなくなったせいか貧弱な家が少くないが、北部では立派な家が多い。とくに納屋が立派である。上等の家ほど柱が太くて腰が高いようだ。家の新築や修繕は乾季のあいだの男衆の大事な仕事である。親類のものや近所の人が手伝っている。しかしこのごろは職業的大工を呼んでくる例もふえてきたという。

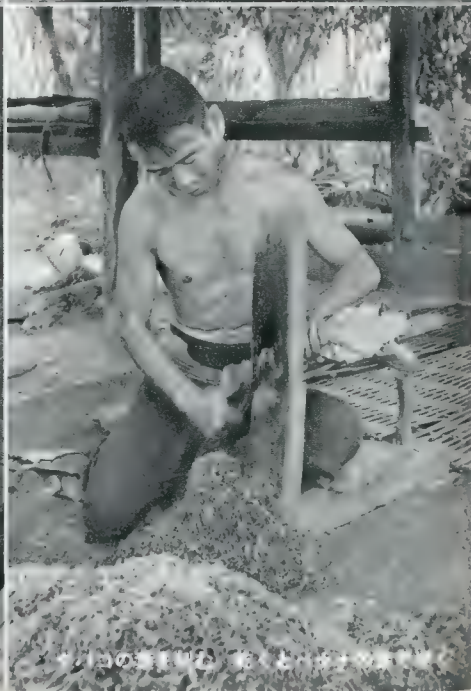
村の小学校．屋根と柱だけの校舎も少くない

食事　食事に行きあわすと、一緒に食べてゆけとかならず誘ってくれる。北部では主食がモチ米だから、ちょっとにぎるだけでかたまりになる。いく皿かある副食物の、どれか好きなのをチョイとつけて食べる。どれも辛くて口の中が火事になる。肉や魚などはこまかくたたいてミンチのようにしてあるが、トウガラシがふんだんに入っている。野菜にもよい匂いのものがある。

子供たち　赤ん坊のいる家では、だれかがいつもゆりかごを揺っている。子守歌はあるのだろうか。聞かなかったように思う。外へ連れて出るときには抱いてゆく。腰骨にまたがらせて、脇腹につかまらせるのである。子供のしつけがとくにきびしいようにも思えないが、なかなか行儀がよい。坐っている長上の前をとおるときには、小腰をかがめたり、膝であるいたりする。

広縁でブタを料理する

広縁の一隅で洗濯[illegible]

ひるの食事。手前のかご[illegible]

[illegible]ナナの軸をついてブタの餌にする

綿の種子をとってほぐす

女性　衣料をととのえるのは食、住にもまして女性の役目である。西洋風のブラウスとか、男の労働着、制服など、町で買うことが多くなったが、それでも買うよりは自給衣料の方がはるかに多いという。寝具などもととのえる。農村の女性はよく働く。人あたりもよい。わたしたちがバンコックを発って北へ向うとき、北部には美人が多いから気をつけなさいと忠告をうけた。

都市と村　この国では、近代産業の発達はまだ大規模でないので、大部分の農村は自給自足体制を大きく保っている。平原部では炭焼き、北部では煉瓦つくりが、現金のための副業としては目についた。都市と農村の関係は大して有機的ではないようだ。日本では考えられないことだが、都市のすぐ近くにありながら、通勤人口を持たない村もある。村人はほとんど旅行もしない。

村のお寺　娯楽の少い農村にとって、お寺のまつりははなやかな行事である。お寺は村に一つはかならずあって、義務教育が今のように行き渡る前は、これが村の教育機関でもあった。お寺と坊さんの生活をまもるのは村の神聖な義務である。お寺にささげる食糧は農家当りにして、家族が一人ふえたのと同じ位である。ほかに現金収入の約三分の一がお寺に捧げられるという。

パースナリティ　仏教国のせいであろうか、この国の人のパースナリティはまことに温和である。外来者に対しては開放的である。もとめられれば寝具を出して泊らせるのも習慣であるらしい。わたしたちの調査の目的の一つは、タイの農民のパースナリティをしらべることにあった。ロールシャハ・テストを用いたのだが、それに対する反応は日本農民とかなり似た点がある。

……道を走る運転手の休憩地

郡長　村には村民の選挙した村長さんがいる。いくつかの村が組になって組長さんがいる。組長さんは郡長さんの指揮下にある。郡長さんは、政府の任命によるもので、その権限は大きい。タイではふつう、聟さんが嫁さんの家へ聟入りする。当然嫁さんの両親の同意がなければ結婚は成立しない。滅多にないことだが、両親の反対を押して結婚したい時には郡長さんに願い出る。

いなか町　郡役所の所在地は立派な町で営林署や警察もある。バスの中継地であり、地方の物資の集散地である。村人はここへ余った農作物を持ってきて市が立つ。町から村へは行商人が出歩くし、野菜の買い出しに行くものもある。山から町へ買い物に出てきたカレン族やミャオ族などの姿も見られる。町の有力者たちがごひいきの食堂に集って食事をしているのも見られる。

山岳地帯へ　北タイでは、熱帯雨緑林の生態について重点的に研究したいと思っていた。山岳地帯にふみこまなければならないのだが、自動車で行けるところまで行く。タイの道は、でき上った国道はなかなかよいが、それから一歩出はずれると、ひじょうに悪いことが多い。車はしばしば行きなやむ。

……人の助けをもとめる

ドイ・インタノン　チエンマイの西南百キロあまりのところに、タイ国の最高峰がそびえている。高さは約二千六百メートル。ドイ・インタノンという。ドイは、北タイ方言で「山」のことである。わたしたちはこの山に登ることにした。ふもとの村まで車でゆき、そこからさきは歩いてのぼる。

……い渓谷をさかのぼる。ゾウ使いの小屋……

ゾウをやとう　人間は歩くとしても、荷物はどうするか。この村にはゾウがいることがわかったので、二頭やとうことにした。ゾウはふだんは山で材木引き出しの仕事をしている。おとなしい家畜である。しかし、荷物を積んで見ると、あんがいすこししかのせない。五十キロ程度だ。賃銀はかなり高い。

ウマ隊　ゾウのほかに、ウマとロバをあわせて六頭やとった。ふりわけ荷物にして、これにのせる。輸送用家畜としては、この方が実用的である。ほかに、馬方を二人と、炊事人夫二人をやとった。ゾウにはもちろん、ゾウ使いがそれぞれ乗っている。山道にかかる。

渓谷をのぼる　ドイ・インタノンという山は、ひじょうにボリュームのある山だ。高さは大したことないが、山が深い。二日や三日でカタがつく山ではない。大きな渓谷にそって登って行った。徒渉をくりかえすが、ゾウと人間は安全に渡っても、いちばんヘタなのはウマだ。川床の石の間に足をつっこんで、ひっくりかえったのがいる。

森林　谷ぞいには常緑樹林があるけれど、一般の斜面は、すっかり雨緑林におおわれている。紅葉し、落葉したあとである。わたしたち一行には、タイ側から三名の参加者があった。バンコックのチュラロンコーン大学から二名、チエンマイ営林局から一人来てくれた。

カレン族　川を渡り、森をぬけて上ってゆくと、思いもかけぬ山の中に、人間のすまいがあった。それは、カレン族とよばれる人たちであった。いわゆる森林民族の一種で、平地にすむタイ族などとは、あまり交渉がない。ビルマではなかなかの大勢力らしいが、タイでは山の中だけの少数民族である。床の高い、木の葉ぶきの屋根の家にすむが、側壁が外側に傾いている。服装は大へん特徴がある。娘さんは白、結婚すると黒、男は赤いのを着る。やは

り米をつくっている。斜面を切りひらいて、段々ばたけに水田をつくる。水牛、ブタ、ニワトリなどを持っている。

…白のサック・ドレス

類人猿をもとめて　山にはいった一つの目的は、類人猿の一種、テナガザルの野生生活を研究することにあった。その群のなき声の記録をとるために、ここまで、録音機とともに、重い鉄製の集音機をもって来た。キャンプ地で、毎朝早くから待機していたが、とうとう、幾群かの声のよい録音がとれた。

テナガザルのなき声の録音をとるために

カレン族の人夫　カレン族の最後の部落までは、家畜が入るが、そこから先は荷物の輸送も人力によらなければならない。カレン族の中から人夫を募集した。かれらはあまり登山の経験はないが、強いことはめっぽう強い。もちろんみんなハダシである。酋長が人夫頭としていっしょに来てくれた。

…はカレン族の人夫が荷物を背負う

道のない密林　最後の部落から上は、もう道はない。まだ比高千メートルほどある。カレン族の人夫のうちの三人が、から身で先頭に立って、山刀をふるって道を切りあけてゆく。そのあとを荷物をもった人夫たちが進み、最後を隊員がゆく。急傾斜の密林で、時間を食う。頂上までまる一日かかった。

道はなく、行程ははかどらない

山地常緑林，ドイ・インタノン中腹

山地林　低いところの森林は、主として落葉性の雨緑林だが、標高千メートルくらいから上は、山地性の常緑樹林になる。雨緑林では、フタバガキ科などの見なれぬ樹種が多かったが、山地林ではシイ、カシの類が多く、ちょうど日本の南九州の山地の森林を歩いているようで、われわれにも親しみ深い。

着生植物　このへんの森林で目立つことは、着生植物が多いことだ。とくに着生ランが多い。いろいろな形のランが木の上について、かれんな花をさかせている。頂上近くは、いわゆる蘚苔林になっている。木の幹、枝、葉の表面までが、すっかりコケにおおわれている。金緑色にかがやいて美しい。

着生ランの群落

着生ランの一種デンドロビウム

頂上　ドイ・インタノンは頂上まで巨木の密林でおおわれていた。頂上のすぐ下でキャンプする。熱帯とはいえ、さすがに冷えて、夜の最低気温はマイナス三度になった。これは、いままでこの国で観測された最低記録であろう。あくる朝は一めんの銀世界だった。タイの人たちは雪かと喜んだが霜だった。

山頂のキャンプ

頂上近くの森林。木はすっかりコケにおおわれている

ミャオ族　タイ国内には種々さまざまな民族がすんでいる。その生活様式に従って、平原民族、森林民族、山地民族の三つに分類できるとすると、タイ族は平原民族の代表であり、低い山地の森林で畑作・水田の両方をもつカレン族などは森林民族に入る。真の山地民族の代表は、ミャオ(苗)族である。かれらはひじょうに高いところ、千メートル以上の山にしか住まない。飛行機でこの地方の山岳地帯の上をとぶと、あちこちの山頂や稜線上に、森林のはげた空地が点々と見える。それがミャオ族の部落である。山の上だけがかれらの領分だから、となり村といっても、谷をへだててはるか遠い。こういう分散隊形で、南中国の貴州・雲南から、広西、ラオスの山岳地帯をつらぬいてタイまでのびて来ている。かれらのタイへの移住は、比較的新しい。もともと、タイ族自身がそうであるように、この地方では、北から南への民族移動の波が、何度もくりかえされた。ミャオの移住は、そのもっとも新しい波である。かれらは、この半世紀ばかりの間に、四百キロも南進している。かれらの起源については疑問の点が多い。

かれらの伝説によれば、氷雪の地方から南下して来たという。言語の系統もいまのところ確定的なことは言えない。

かれらはたくみな山岳騎手である

糸くり

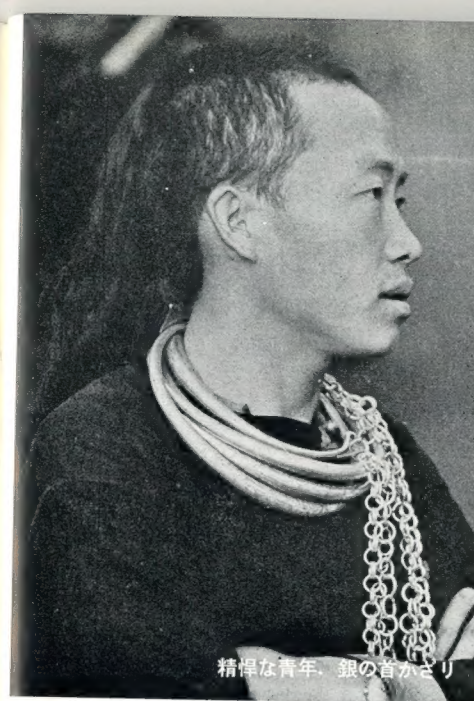
ひき臼

ミャオ部落を訪ねる　チエンマイのフランス教会が、ミャオに布教しようとして、働きかけをはじめている。その

夕方になると，荷を背負ってみんな帰って来る

家は土間である，下は台所，屋根裏は物置

神父さんと一しょに、あるミャオの部落を訪ねた。ふつうは陸稲もつくるようだが、この部落では米はつくらずに、ケシの栽培が主であった。アヘンをとる。それを華僑の仲買人が買いあつめに来るのである。密栽培だから、外部から人が来ることを、大へんいやがる。家畜は、ブタ、ニワトリのほかにウマを持っている。乗用と駄用である。昼間は、男も女も山の畑へ出て行って、部落には子どもばかりしかいない。夕方になると、荷を背負って帰って来た。

わたしたちが泊った家の主婦．30才くらい

精悍な青年．銀の首かざり

ミャオの女の子．赤ん坊はおんぶする

ミャオの風俗　家は、タイ族やカレン族の腰の高い家とはちがって、土間である。いろりで火をたく。服装は、男は黒い上衣にすねまでのズボン。丸いかざりのついたお椀帽をかぶる。女は、美しい刺しゅうのあるスカートに、前かけをする。足にはきゃはんをはく。男も女も、首に銀の輪をたくさんかけている。財産をこういう形にして、つねにもって歩いているのだ。衣料は自分で織るが、アヘン密売でかなり現金収入があるので、ぜいたく品も入っている。たとえば、くつをはいているのがあんがい多い。ときどき山を下りて、必要品を買ってくる。おもしろい楽器をいくつか持っている。大小の笛のほかに、長い吹口のついたショウのようなものがある。中国文化の影響をうけ、漢字のわかるのがいる。性質は精悍で、戦争中は抗日ゲリラをやった。

盛装の男たち．ショウに似た楽器

神父さんと村の長老．竹の水タバコ

岩波写真文庫目録

1* 木綿
2 昆虫
3* 南氷洋の捕鯨
4* 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10* 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19* 川 —隅田川—
20 雲
21 汽車
22* 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 鉱山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43* 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47* 東京—大都会の顔—
48* 馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54* 水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57* 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61* 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65* ソヴェト連邦
66 能
67* 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90* 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94* 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97* システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105* 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内 —洛中—
109 京都案内 —洛外—
110 写楽
111 熊
112* 東京湾
113 汽車の窓から —東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126* 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132* 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136* 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる —空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅 —桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年 —秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史 —ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる —空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖
271 福岡県
272 日本 —1958年正月—
273 宮城県

*印は品切でございます

新刊

鳥取県

274

275

276

ミャオ族の民謡も録音にとった．かれらは自分の声におどろく

帰国報告会

その後　わたしたちは北タイの山岳地帯での共同作業を終って、それぞれの専門の仕事のために、分散した。一九五八年三月に、全員ふたたびバンコックに集結し、四月はじめ乗船、帰国した。まだ、東タイ国の旅行として北タイと南タイとを見てまわらなければ、はまったく不完全なのであるが、こんどは費用と時間の関係でそこまでは手が及ばなかった。それは、つぎの機会にしよう。

わたしたちの調査隊は、ごく小規模のもので、研究の内容もかぎられていたが、その範囲内ではある程度の成果をあげることができた。植物関係では、標本約六千点、ほかに森林の生産力測定など生態学的資料を多数得た。動物では、テナガザルの野生生活を観察し、帰国のときにはかれらを三頭つれて帰った。いま、犬山の日本モンキー・センターで飼育研究中である。昆虫は、標本約五千点を得た。人類関係では、各民族の生活様式に関する資料のほかに、ロールシャハ・テストによるパースナリティのサンプル約五十例をとった。しかし、東南アジアの研究は、何といってもまだ始って間がない。基礎的な資料がまだまだ不足しているのである。これから現地の科学者たちと協力して、何度も調査を重ねなければならないと思った。終りに援助をいただいた方々、とくにタイ国チュラロンコーン大学、営林局、および在タイ日本大使館の方々に深く感謝をささげたい。

魚とり．中部タイの農村にて

¥ 100